

学校をつくろう！通信



第131号

学校の役割

その 110

N国党(略称)という政治団体が先般の参院選の比例区に候補者を立てていました。政見放送では「NHKをぶつ壊す」とNHKの電波を使って訴えていました。何か変な感じですが、公共放送の面目躍如？でしょうか。この変な感じは、「アメリカを批判するならアメリカから出て行け」に加担するものかもしれません。「原発批判するなら、電気使うな」に通じるところあり、ですか。不適切なところがあつたとすれば、撤回させていただきますが、何か変です。別にNHKを擁護する気はありませんが、何か変！です。「セッソウがナイ！」のでしょうか。

ところで、もっと変なことがあります。言論の自由や表現の自由を否定するようなスピーチ。批判に対しては言論の自由や表現の自由を盾にする。奇異を通り越して恐ろしさを感じるのは、そのようなスピーチが支持を受けるトンデモナさです。困ったことです。しかし、「言論の自由」や「表現の自由」はそれを否定する自由を含んでいるということも忘れてはならないことです。だから、自由は価値を持つと言えるのだと思います。人がやがて作る世の中の眩い可能性を感じさせる言葉です。

人類はその長い種としての体験と思索の中で様々な概念を作り出すとともにそこに価値を見いだしたものもありました。それを生活の中に具現化しようとしました。個という概念の獲得とそこに価値を見出したこともその一つです。その価値を生活の中に根付かせようと努めています。例えば、「言論の自由」や「表現の自由」も個の尊重から生まれる自由です。珊瑚舎スコーレが大切にしている三つの概念、自由・自立・平和もその基盤には「個の尊重」があります。

珊瑚舎スコーレはその活動を学校教育という言葉ではなく、「学校文化」という言葉で捉える方がより適切だと考えています。授業を核とした諸々の活動

が作り出す知的・芸術的状況が学校文化です。学校文化は人の成長と変容を自ずと惹起し、促し、育む力を持っています。人は巧まれた世界の中で成長や変容を手に入れるのではなく、巧まざる状況の中でその人本来の成長や変容を手に入れると考えています。巧まざる状況には人為を超えた力が生まれる場という意味合いがあります。人のDNAには自らの成長と変容への希求が組み込まれており、それは人に操られて現れるようなものではありません。

大学の教育学部の講座を担当していますが、研究授業の後で学生たちが授業案通りに授業が進まなかつたとよく言います。もちろん、授業案通りに授業が進むことを是としているのですが、イメージトレーニング通りに実際はならないのが当たり前のものです。意図しなかつたような主体的な場を生徒たちが作り出すことの大切さを伝えています。適切ではないかもしれません、陶工の仕事に授業を例えると、陶工は自身の作為が及ばない窯の炎の中に作品の仕上げを委ねます。授業はこれと似ているところがある、授業における炎はそこに集う三者つまり、生徒・教員・教材の思索と感覚の交感です。その交感の中で人の成長と変容のドラマが生まれるのです。それは教員の意図を超えたものです。

ところで、「言論の自由」、「表現の自由」に戻りますが、珊瑚舎スコーレの建学の理念を批判する「言論の自由」や「表現の自由」は「学校をつくろう！」の当事者である生徒や教員にあるのでしょうか。もちろん、あります。大切なことは理念をめぐって意見を交換することであり、その結果どう考えてもその理念が人間に寄り添っていないものであれば変えなければなりません。その理念は以下の通りです。

「学校教育の中核は授業であり、授業は生徒・教員・教材の三者の交流から生まれるその場に参加しなければ手に入れられない知的・芸術的体験の場として位置づけられなければなりません。」(ほ)

がじゅまる しんかぬちやー



(生徒・学生のコーナーです)

2019年度の馬天ハーリーは6月9日(日)。晴れ間もあったものの、雨模様が気になる中でのスタートでした。昨年は台風で漕ぐことができなかつた分、今年は練習から気合の入っていた生徒達でした。

一般の部に風丸、波丸の2艘、そしてギリギリで女子チームも出場を決めました。途中、大会を中断するほどの雨と雷に見舞われ、テント内も全てびしょぬれ。落ち着いたころを見て決勝戦だけ行われました。結果、一般の部では風丸が僅差で優勝を逃しました。女子天丸チームは2連覇を飾りました。大会終了後、珊瑚舎独自の賞である「漕ぎ美らさ（漕ぎ方の美しさ）」、「揃い美らさ（揃った櫂さばきの美しさを体現する漕ぎ手達）」が発表されました。今年の「揃い美らさ」は波丸チームに、「漕ぎ美らさ」は市川瑠禾さん、石嶺織愛さん、城間柚花さんに送られました。

「馬天ハーリー」

中等部 花城亜彩里

私は、珊瑚舎に入って初めてハーリーを漕ぎました。初めて船に乗って漕いでみたけど、櫂の入れ方もわからなくて前の人を結構濡らしたりしてしまったけど、竹ちゃんや響生に教えてもらったことを覚えて漕いでみると、漕ぎ方が少し良くなったりして漕ぐのが楽しくなりました。それでもやっぱりきてハーリー辞めたくなった時もあったけど、友達が励ましてくれたこともあって、何とかハーリーを続けることができました。

何回か漕いでも、やっぱりターンの時は重たくてなかなか櫂が合いませんでした。それでも、皆で力をふりしぶって練習を終えることができました。

練習の後は、皆で差し入れを食べたり、海に飛び込んだりしました。本番前は、飛び込みができなくなつて少し寂しかったけど、いよいよ本番が近いんだな、と感じました。

本番前の最後の練習の日、その日は一回ずつ漕いで終わりました。竹ちゃんとやまのはさん（漁業組合長、毎年ハーリーでお世話になっています）に、漕ぐ時しっかり合わせてね、などのアドバイスをもらってその日の練習を終わりました。

本番当日、馬天港に着くと一気に緊張してきました。皆で話したり、円陣を組んだりしているうちにどんどん出番が近づいてきました。

緊張で不安が襲ってきたけど、友達が励ましてくれて、自信をもつことができました。

ハーリーの途中、大雨で一時中断などもあったし、大雨の中いきなりマグロの登場で解体が始まって皆、今マグロなの？っていう状況もあったけど、そこもおもしろかったです。

雨がおさまっていよいよ女子チーム本番がきました。乗る直前まですごく怖かったけど、乗るともうやるしかない！とことんやってやる！という気持ちがわいてきました。

いざスタートすると、合わせることと漕ぐことに必死で終わった時にはどっち!? 勝ったの？という状況でした。

結果、女子の天丸が優勝、風丸が2位、波丸が4位(?)という結果でした。初めて乗った船で優勝できたのはいい思い出になりました。

来年も、3連覇めざしたいです。

「慰靈の日特別授業」

高等部 上野響生

高校最後の慰靈の日。その日「慰靈の日特別授業」が終わった時、みんなが笑っていたのが印象に残っている。今年の特別授業は「お笑い米軍基地」の人、まーちゃんとのユンタク（おしゃべり）だった。

「お笑い米軍基地」はざっくり言えば風刺劇集団だ。日本のあらゆる時事問題を風刺している。そんなまーちゃんとのユンタクの中でグサッと刺さったものがある。「笑うためには準備がいる。心に余白、間、がないと人は笑えない。」

この言葉は授業が終わった瞬間から、ずっと心の中に引っかかっている。今までの特別授業では、主に沖縄に焦点を当てて具体的な数字、情報を知り「考えないといけない」ということを知った。今年はユンタクの中で具体的な数字、情報は出なかった。風刺ネタは見たけどその風刺の内容を説明することもない。もっと身近な事だった。

「どうやって考えるのか」「何をするのか」「自分に何ができるのか」身近で日常の中でできる「平和」をまーちゃんなりの視点で話してくれた。ちっちゃくていいと思った。自分が日々の中で、「平和だな～」と思うことを探してやり続けていきたい。



ふくぎのふあー



(講師・スタッフのコーナーです)

こちらのコーナーに寄稿するのは、初めてです。本年は、中等部の『陶芸の時間』を担当させていただいている育陶園やちむん道場の鶴田貴大と申します。

私ごとのですが、先日誕生日を迎えました。そこで、初回の寄稿としては、不適なのかもしれません、ここ数年来、誕生日の付近で読んでいる本について、文章を書かせていただきたいと思います。

誕生日前後になると、開く本があります。『人間臨終図巻』。作者は、山田風太郎。『魔界転生』『甲賀忍法帳』などなど大衆時代小説の作者・・・とくに『甲賀忍法帳』は『バシリスク』と名をかえて漫画もあったりするのでよく知っている方も多いのではないでしょうか。

とはいって、この『人間臨終図巻』は、少なくとも小説ではありません。どこのジャンルに振り分けたものか、改めて考えてみると少し悩むのです。

まず、内容はといえばタイトル通り、人の死に様を書き綴ったもので、文庫版で4冊にわたって古今東西さまざまに著名な人物が、その没年順でそれぞれの死に様という形で登場します。その数923人。その点では、伝記といえなくもないのかも知れないけれど、その人が「何をどのように為したか」ではなく「どのように死んだか」という点に焦点を絞っているので、通常イメージされる「伝記」とは、一線を画しているように思われます。登場する人物も歴史を動かした・・・もしくは、歴史に動かされた・・・人物といった人物に限りません。これは作者の取捨択一によるもののように見えます。また、

い人物には、5ページ以上にわたって詳細に書かれたりもしていて、これも、その人物の歴史的な影響力ではなく、作者の「気持ち」によっていると思われます。その点でも人物事典とか、伝記集といったものとは、異質のものだろうと思うのです。

なにより、一部を読んだだけでは、感じ取れないのだけれど、全体を読んでみると、作者の歴史観・人生観・価値観が全体に貫かれていることが感じられます。「作者」が存在しないような内容でありますながらも、確固たるこの本の「作者」がその文章で作り上げた「作品」なのだと思うのです。それゆえに、とても語弊がある表現とは承知しつつも、とても面白いと感じてしまう自分がいます。

誕生日に近い休日のちょっとまとまった時間が取れるとき、本棚からこの本を取り出して床にすわります。その毎年順に並んだ文章から、人名と生没年を冒頭にして、自分の新しい年齢と同じ毎年となっている人物の部分をまず読んでみるのです。傍から見るとなかなかに悪趣味というか、自虐的に見えるのかもしれないけれど、これが、ここ数年にわたっての恒例行事となっています。

一応、4巻とも持ってきます。しかし、このあいだの誕生日で迎えた年齢は、39。まだまだ、1巻も中ほどといったところです。戦いに敗れたクレオパトラ。考える葦のパスカル。ルイ16世がギロチンにかけられる。ショパンが苦しみあえぎながら遺書を残したもの最後は結局よくわからない。シャーロット・ブロンテ、横川省三と続く。そして、太宰治が登場して驚くというか慌ててしまう。最後は、力道山で、そのあとは・・・「四十歳で死んだ人々」・・・また、来年改めて読む人々です。

さかのぼると、高杉晋作は、28歳没なので11年前。坂本竜馬が斃れたのは32歳なので7年前にすでに追い越してしまいました。正岡子規と芥川龍之介がともに35歳没なので4年前、不思議と正岡子規の印象が強く残っています。そして、先日ニュースでその最後に使ったという拳銃がオークションにかけられて高値で落札されたというニュースを聞いて、私は、率直にいって相當に苦いというか嫌な

感じがした37歳のゴッホは2年前でした。同じ2年前に読んだ、宮沢賢治も印象深く、そして、締めの文章が辛らつというか身もふたもない。そして、昨年の部分には、メンデルスゾーンや岸田劉生とともにマリー・アントワネットの名前がありました。

自分と同い年の人々の死に様を読みながら、いろいろと考えてしまいます。時間は有限なのだということ、時間は、1年は365日で、1日は24時間。これは、この本で登場した人々も私も同様なのだと考えると、なんだかぞっとしてしまいます。同時に、このような人々でさえも、一期の限りがあってその中で生きていて、自分もまた同じなのだと考えると不思議な安らぎもあるのです。

しいてこの本の人々と自分の違いを挙げるなら、この本で読んでいる人々の時計は、すでに止まっており、私の時計は動いているということです。時計が動いている限りにおいて、私は、私の周りの世界に対して何かを受け取ったり、何かを与えてたりすることができます。そして、それは、新しくなり続ける世界の中で自分を新しくさせ、かつ、世界を新しくさせることができるということでもあります。

これから1年、私の世界は、どのように変わるだろうか。私は、どのように変わるだろうか。私は、どのように私の世界を変えるだろうか。なんだか少し面白くなってきたので、本を閉じることにします。また、来年。

(中等部「焼き物講座」鶴田貴大)

子どもがんまり便り



「第一回 子どもがんまり」 参加して

藤井粹子(保護者)

私は珊瑚舎スコーレが好きです。

学生の頃、友達が珊瑚舎夜間学校のアルバイトをしていて、よく話をしてくれました。

「大人が本当に楽しく勉強をしている」

なんとなく珊瑚舎はずっと気になる存在でした。

それから、子どもが生まれ、成長すると共に、珊瑚舎スコーレがとても身近に感じる様になりました。8歳の長男は小学校へ通わず、家族や同じ思いを持った仲間達と過ごしています。

初めて子どもがんまりへ行き、お土産のドングリクッキー持ちキラキラした顔で帰ってきた息子を見たら、楽しかったのが充分伝わってきました。いろんな年齢、いろんな特技、いろんな人たちが楽しみ、関わり合う場所。安心できる場所。

私は今回の畠の学校、素敵な文子さん（今回の講師：『畠の学校』主宰）の会に参加しました。ほんとに。こんな素敵なお先生と自然の中での授業は最高です。何か好きな事をとことんつきつめる人こそ、最高のお先生ではないか、、、一番私が満足して帰りました！

これからも珊瑚舎スコーレの活動を楽しみにしています。

マチカンティー



(夜間中学校のコーナーです)

“まちかんてい”（待ち兼ねていたよ）は「7歳の時から自分が通う学校がいつか出来ると思って、60年待ちました。夢は実現するものですね」と話してくれた生徒の言葉からもらいました。

連載 聞き書き その70

<M・Tさん談>

週1回ですが、那覇市のチャーガンジュウ課（健康推進課）が主催する会に出ているんです。血圧測

定、体操、歌声活動などがあります。そこに沖縄大学の先生が夜間中学校って知っていますか、勉強が出来ますよと話にこられました。向学心のある方は高校、大学と進む道が開かれているとか、そういう時代になったのかと思いました。76歳ですから進学は考えていません。この3年をいい時間にしたいですね。

四国の出身です。家庭環境が複雑でしたが、祖母は長男が大陸で戦死し、叔母や叔父に仕送りをする大変な苦労の中、孫の私を育てくれました。15歳で名古屋の紳士服縫製の会社に集団就職をしました。中学の校長先生がこれからは女も立派な労働者として生きていく時代、技術を身につけなさい、ここは学校にも通わせてくれると紹介してくれました。学校に通えると聞いただけで胸が躍りました。

実際は社長の家に住み込みでこの家のお嬢さんの遊び相手、まかないが仕事でした。給与は1か月1,000円でしたが、辛かったのは日曜日も自由に外に出してくれないことでした。今思えば田舎者の若い女の子を心配したことでしょう。職場は英国の生地で注文の背広を作ることで、2年目からは私も背広作りを習い始め縫えるようになりましたが、女は努力しても銀行員の背広つまり制服を作るのが精一杯で、10万もする英國生地を使った注文服やモーニングは男性専門の仕事でした。学校に行けると聞いていたのですが、2年経っても学校の「が」の字もありません。思い立って中学校の先生に手紙で相談しました。それが功を奏し3年目から月2回でしたが、縫製会社の組合が作っている職業学校で製図、採寸、簡単な簿記、イギリス製の生地についているラベルが読めるような英語の勉強が始まりました。

勉強も楽しかったのですが、学校に通うために自由な時間が出来たことがなにより嬉しかったです。学校のそばに大学が2校あり、学生たちが配るチラシも興味をそりました。それまではメーデーは労働者が旗をふって散歩する日だと思っていました。ある時、学生が成人式のビラをまいていました。男の職場でしたから、話し相手が欲しく、フォークダ

ンスや歌声運動に胸がときめきました。「タコ部屋」「搾取」と言った言葉も耳に入ってきました。ちょうどその頃中国に抑留されていて帰還した15歳以上の女性が職場に入りました。彼女は義足を脱いで足を見せながら戦争がなければこんな事にならなかつた、二度と戦争を起こさないためになにをすべきかを語っていました。そうしたこともあり、集団就職した職場にずっといるものと思っていた私でしたが次のステップを意識するようになりました。最後の1年はお礼奉公でしたが6年間務めました。給与は6,000円でした。

移った先は大学生協です。女は皿洗いならいいという意見もあったようですが上司がやる気があるからOKと紳士服売り場を担当しました。今までリクルートスーツの販売です。少しぐらいのサイズ直しはお手の物、仕入れの手伝いもします。この職場で主人と知り合い、結婚しました。彼は体が弱く、郷里の沖縄に戻ることにしました。沖縄は初めての土地、しきたり等分からないことばかりで苦労しました。以前の仕事を生かそうと大学の生協に申し込みましたが子連れは無理と言われ紳士服の縫製店に勤めました。給与が39ドル、保育料が28ドルです。子供が二人だったので本当に苦労しました。子供の面倒をみながら出来る仕事は新聞配達、ダスキンの配達などなんでもやりました。学歴が中卒ですから出来る仕事には限りがあります。でも雇われたら実力で認められるので、いい仕事をしてきたと思います。

途中6月に夜間中学に入学したので、なにをやるんですかとオロオロしています。級友に頼っていないで自立しないといけないと感じます。びっくりしたのは授業に三線があること、触ることすらない楽器と思っていましたが、音色は好きなので3年間で一曲は弾けるようになりたい。数学、理科は、そうだったなーと思い出すことが多く、それが楽しいです。今まで子どもが病気がちのこともあり、夜出歩くことはなかったので、夜間中学に入って、夜遊びを始めたのかと思われているかもしれません。

お知らせ

『菜の花の沖縄日記』（出版図書ヘウレーカ）という本が8月12日に刊行されます。著者の坂本菜の花さんは珊瑚舎スコーレ高等部を2018年春に卒業しました。彼女は在学中、出身地の地元新聞（北陸中日新聞）で月に一度『菜の花の沖縄日記』というコラム連載を続けていました。本書はその連載に加えて卒業後の文章や珊瑚舎スコーレの星野・遠藤との座談会を収録しています。自分の殻を破ろうともがいていた15歳の女の子が沖縄でのさまざまな出会いや体験を通して、まっすぐ自分や沖縄と向き合った3年間の記録です。

★ ★ 事務局便り ★ ★

★ 今日は「まにまに祭」（前期学習発表会）の当日で生徒たちは朝から準備をしています。体育の棒術はベランダで行う予定ですが、昨日から激しい雷と雨が断続に続いている、本番の天候がカギです。演目の1つにアクト&ドラマの授業があります。慰靈の日にお呼びした小波津さんに刺激を受けて、彼らなりに珊瑚舎スコーレを舞台にした風刺劇を演ずるそうです。台本は高等部、出演は初・中等部の生徒です。どんな風刺が楽しみです。

★ ★ ★

●今年度(6月1日～7月31日)寄付・カンパを頂いた方々
石田みどり鹿糠文子坂本和子岡村健手塚賢至照本祥敬市野寿子
当山幸江森口美千恵三浦幸子山田道子助川寿美子式部恵子丹羽
雅代與儀勝子与那霸晴海湯本貴和上田秀一大城喜春北上田登久子
盛口佳子真津昭夫家門收一長嶺由紀子橋川由美子小渡律子幸
地江美子城間あづき松茂良米子名城悦子所扶久代石野裕子矢崎
智章尾崎せき松田晴代萩原真美城間栄順村上呂理伊波雅子仲里
博彦下地孝野村佳雄西山哲平智海竹内新辻口先生諸見里安信島
袋正雄早石周平長谷川途子橋川由美子古堅苗山田晶子今泉美代子
中村久子荒川紀美江大垣千鶴永田満友寄和子穴田浩一宜保洋子
山城良子山縣尚武正田久子菊入直代杉浦暁長堂忍ニイモト泉
恵子松原慶子安田圭太郎高里鈴代鈴木和男西原邦男上間晋一志
賀マサ子小林啓友

発行者：珊瑚舎スコーレ事務局 遠藤知子

住 所：〒900-0022 那覇市桶川1-28-1-3F

Tel : 098-836-9011 Fax : 098-836-9070

Mail : sango@nirai.ne.jp

URL : <http://www.sangosya.com>